



統計から社会の実情を読み取る

第91回 高校生の男女別生活満足度（国際比較）

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、「統計データはおもしろい！」(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。



日本をはじめ東アジアの高校生の生活満足度は低い

高校1年生を対象とする国際学力テストであるOECD(経済協力開発機構)のPISA(学習到達度)調査は、先進国グループのOECD諸国ばかりではなく、中国をはじめとする非OECD諸国も多く参加しており、3年ごとの調査の結果が公表されるたびに世界中で注目され、日本をはじめ世界各国の教育政策に大きな影響を及ぼしている。

PISA調査では、学力テストのほかに、学力の要因を探るため、生徒に対する調査票によって、先生や同級生との関係など学校生活の状態、あるいは学習意欲、生活満足度などの意識の状態を調べている。

今回は、2015年の調査結果から、世界48か国の生徒の生活満足度の状態を示すグラフを掲げた(図1)。ここで生活満足度は、0から10までの平均点で示されている。

X軸方向に生活満足度の高さそのもの、Y軸方向に生活満足度の男女差を取った散布図を描いた。これを見ると、欧米、ラテンアメリカ、イスラ

ム圏、東アジア儒教圏といった文化圏ごとに、ほぼ例外なく、国々がグループ分けできる点が非常に興味深い。

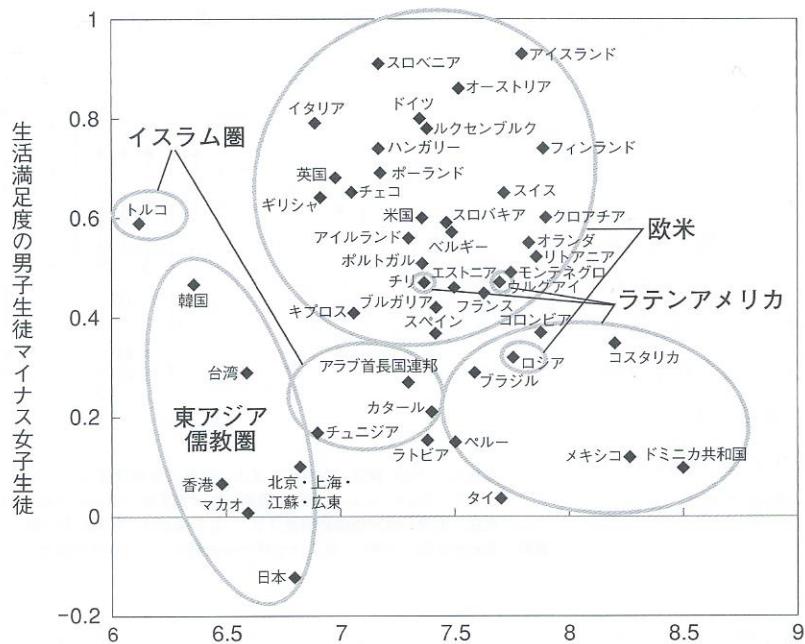
また、日本については、東アジア儒教圏の一国として、X軸方向の全体的な満足度が世界の中でも最低の水準になっているとともに、Y軸方向については、世界では一般に男子生徒の生活満足度が女子生徒を上回っている中で、唯一、女性生徒の生活満足度が男子生徒を上回っている点で、非常に特徴的な位置を占めている。

それでは、なぜ、日本などの東アジア儒教圏で生活満足度が低いのか、また、なぜ、世界では女子生徒の満足度が低く、日本は唯一の例外となっているのか。

前者については、すでに、本連載の「似ているようで似ていない東アジア人」(2014年12月号)でふれた。結論的には、現状をネガティブに判断し、常に、改善へ向けての歩みを怠ってはならないとする「儒教精神のこだわり」が抜けないためと考えられる。

2015年調査のPISA報告書(第3巻)は次の

図1 世界の高校生の生活満足度



高校1年生の生活満足度(低から高への選択肢0~10の平均点)

注) キプロスは南部のみ、ベルギーはフラン語圏以外。ここで欧米とは欧洲と北米を指す。

資料) PISA 2015 Results (Volume III) Students' Well-Being Overview, Figure III.1.1

ように述べている。「ある研究が明らかにしたところによれば、独立心や個人的な感情や関心事が高い価値をもっている米国のような西欧的な文化圏に属する青年にとっては、生活満足度を全体として判断する際に、自分がどんな状況にあるかが重要であるのに対して、韓国のようなアジア的な文化の中では、社会的な義務や教育的配慮が高い価値を有しており、そうした社会的な基準や期待にどれだけ応えられているかが生徒の生活満足度の主な源泉となっているのである」(p.72)。

日本の高校生も、先生や親の期待に十分応えられていないと感じてしまいがちなので生活満足度が欧米などと比較して低くなってしまっていると考えられる。

日本の女子高生だけが男子より生活満足度が高い理由

次に、なぜ、世界では男子と比べ女子生徒の満足度が低く、また、なぜ、日本は唯一の例外となっているのか、について探ってみよう。

図2には、高校生と成人の生活満足度の男女差を両方のデータがある国について対比させた図を示した。成人のデータは世界価値観調査によるものであるが、ほぼ同様の設問で生活満足度を聞いてるので比較してもおかしくないと思う。

すべての国で、生活満足度の男女差（男マイナス女）が、成人より高校生の方が大きくなっている点が印象的である。成人については生活満足度に男女の差があまりないのでに対して、高校生については、男子生徒が女子生徒を上回る場合が圧倒的に多いのである。

国ごとの結果をよく見ると、欧米に対して、アジア、イスラム圏及びラテンアメリカでは、成人と高校生の差は小さいという傾向が認められる。図1と同様に文化圏の影響が無視できないといえる。ただし、アジアでは韓国、イスラム圏ではトルコ、ラテンアメリカではウルグアイ、チリは欧米と同様に差が大きくなつており、これらの国では、欧米文化の影響が大きい可能性があろう。

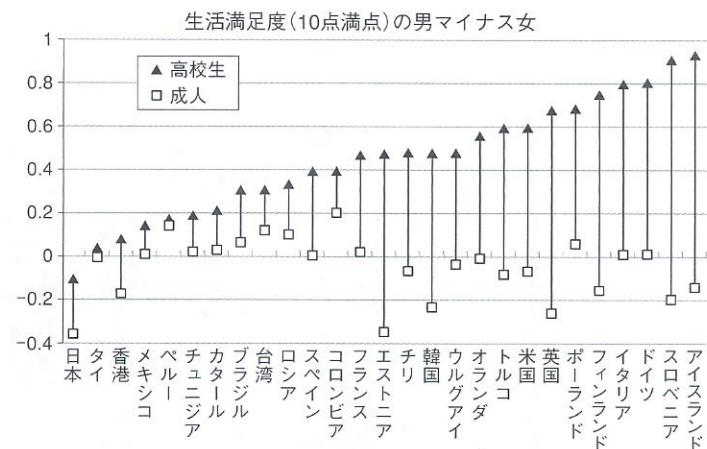
つまり、高校生の生活満足度の男女差は欧米諸国で特に大きくなっていると見てよいだろう。この傾向の理由としては、男子高生が

女子に比べ特に満足度が高いと考えるか、あるいは女子高生が男子に比べ特に満足度が低いと考えるか、どちらかである。上記の PISA 報告書は、後者の見方を取っている。

PISAの分析では、女子高生の生活満足度が男子より低いのは、思春期の女子の厳しい自己批評を反映しているのではないかと考えられている。すなわち、マスメディアが前提にしている「スリムで理想的な体型」、あるいはソーシャル・メディアで共有されている「美しいとされる体型の画像」が思春期の女子の自己認識や満足感にネガティブなインパクトを与えるとされているのである。また、同報告書ではこれと関連して、「体重にもとづく同級生からの『いじめ』が少女たちの自分の身体への不満にむすびついている」という研究にも言及している（同上、p.73）。

こうした傾向は、日本を含むアジアやラテンアメリカ、イスラム圏でも存在しているであろうが、それほど大きく満足度の結果を左右していない。自己の身体イメージをどこまで重視すべきかという文化の違いが影響しているとともに、アジアの

図2 生活満足度の男女差に関する高校生と成人の比較



注) 高校生は PISA 調査(2015 年)、成人は世界価値観調査(2010 年期)及び欧州価値観調査(2008~09 年)による。PISA 調査は生活満足度の最低から最高に向かって 1~10 の選択肢、世界・欧州価値観調査は 0~10 の選択肢と設問が若干異なっている。

資料) 高校生は図1と同じ、成人は世界価値観調査・歐州価値観調査

場合は、実際のところ、女子高生の体型が欧米に比べてスリムであるからであろう。フィギュアスケートの女子選手の演技をテレビで観ると欧米とアジアの選手のボディー・イメージには、かなりの差があるのである。

日本の女子高生が楽しそうなのは旧い
道徳からも新しい規範からも自由なため

ここまで考えてくると、日本の女子高生の生活満足度が、世界で、唯一、男子より高い理由のひとつは、自分の身体イメージについて、欧米のように強迫観念に囚われていないためだと考えられる。

上述のように、東アジアでは、高校生の生活満足度においては、自分の考えというよりは周囲の期待に応えられているかが重要だとすれば、この点に関しても、先生や大人が女子高生の体型についてどう期待しているかがキーとなると考えられる。日本では、少なくともタテマエでは女子高生はあまりスリムでない方がよいという社会的通念が維持されているので女子高生もあまりプレッ

表1 幸福度の対男性の女性超過度についての日本の順位

調査名	時期	幸福度の指標	対象国数	女性超過度の順位
世界価値観調査	2010年期	4段階評価のプラス2段階	60か国	1位
	2005年期	〃	57か国	11位
ISSP調査	2012年	7段階評価のプラス3段階	37か国	3位
	2011年	〃	29か国	1位
	2008年	4段階評価のプラス2段階	40か国	2位
	2007年	〃	34か国	1位

注) 4段階評価のプラス2段階とは、例えば、全体に占める「非常に幸せ」と「やや幸せ」の計の割合といった意味。

シャーを感じていないのであろう。

日本と対照的なのは、韓国である。ある高校で女子高生の制服があまりに小さすぎて身体が収まらないほどだというニュースが話題となつたことから推察すると、身体イメージに女子高生がこだわらずにはいられないような大人からの目や社会的な環境があるため、韓国では、東アジアとしては例外的に高校生の生活満足度の男女差が大きくなっているのではなかろうか。

さて、日本の女子高生の生活満足度が世界で、唯一、男子より高いことを説明するもうひとつの要因は、成人の生活満足度が、そもそも、女性優位であり女子高生もそれと同じだと考えられるからである。

図2では成人の生活満足度については、日本の場合、女性の超過が最も大きかった。また、幸福への世界的な関心の高まりを受けて、幸福度に関する国際調査がかなりの頻度で実施されているが、表1を見るように、各調査での男女の値を算出して見ると幸福度の女性優位が、ほとんどの場合、日本の決定的な特徴になっているのである。

なぜ、日本の女性の生活満足度や幸福度が男性よりこれほど高いのかについての定説はないようだ。というより、その事実じたいが、日本は根強く男性優位社会であるという一般的な通念と矛盾するので、看過されてしまつてゐる。

私の考えでは、幸福度の女性優位が、日本ほど

ではないが、韓国、台湾、香港といった東アジア諸国でも共通である点を考え合わせると、相続や選挙権に関する制度的な男女平等が各国で戦後実現したのと並行して、現代では、かつての儒教道徳から女性がかなり解放されたのに対して、男性の方は、男は一家の大黒柱、あるいは男はか弱い女性を守らなければならないといったような旧い道徳觀になお縛られているから、こうした結果が生じていると思う。男への期待感が大きいだけにそれだけ幸福度を感じにくくなっているというのが私の見方である。

高校生についても、男女共同参画の流れの中で、女子高生は女だからといってこうであらねばならないという道徳觀からかなり解放されているのに、男子高生は、なお、親や先生からの男はこうあるべきだという期待が大きくて、毎日を屈託なく楽しく過ごす環境にないのでなかろうか（例えば、「男らしくしろ」、「男は泣いてはいけない」という規範の影響）。

このように、日本の女子高生が男子より楽しそうなのは、男性と比較して、性差に対する「旧来の」道徳感からの解放が進んでいると同時に、若い女性の身なりや体型はこうあらねばならないというネット社会の「新しい」規範からは外国と比較して自由だから、というのがデータから推察されるといえずの結論である。